

港・花水・なでしこ地区

① 唐ヶ原 MAP G-9

菅原孝標の娘(平安時代中期の人)が記した『更級日記』には、藤沢から大磯あたりを通ったときの回想として次のような記述があります。

もろこしが原という所も、砂子のいみじう白きを二三日行く。「夏はやまと撫子の濃く薄く錦をひけるようになお咲きたる。これは秋の末なれば見えぬ」というに、なお所々はうちこぼれつあはれげに咲きわたれり。「もろこしが原に、やまと撫子しも咲きけむこそ」など、人々おかしがる。

この「もろこしが原」がどこを指すかについては、さまざまな説がありますが、平塚から大磯にかけての海辺と考えられます。江戸時代の正保国絵図には平塚の海辺に「唐ヶ原」と記してあります。

② 村井弦斎 MAP H-8

明治・大正時代に活躍した作家で、文久3年(1863)愛知県に生まれました。東京外国語学校に学び米国へ留学後、「報知新聞」の記者となりました。連載小説『食道楽』や『日の出島』は国民的な人気を呼びました。



明治37年、弦斎は旧平塚町東浜岳(現在の平塚市八重咲・松風町)に1万6千余坪の屋敷を構えて住み、邸内に菜園、果樹園、畜・鶏舎を作り、一流の調理人と珍しい食材による豪華な料理を紹介し、食文化の向上と大衆化に寄与しました。昭和2年(1927)7月、64歳でこの地に没しました。

③ 長楽寺の庚申塔 MAP I-8

この庚申塔の青面金剛は、四臂それぞれに剣、宝棒、三叉戟、竊索を持ち、頭には三山冠を被ります。左右の二猿は両膝を立てて正面を向いて座り、右猿は手を膝の上におき、左猿は膝上で手を結びます。



四臂青面金剛と二猿の庚申塔は、県内に他に六基あり、これらは承応2年(1653)から明暦4年(1658)に建立されていることから、本像も同時期に建立されたと考えられます。台部に「逆修也」の刻銘があることから逆修供養のために造立されたことがうかがえます。

全国に青面金剛と三猿が庚申塔の刻像として定型化していく祖型として、資料的価値が高く貴重な石塔です。

④ 港小学校のあゆみ MAP I-8

- 明治 7年(1874) 5月 崇善館第一支校と称し、海宝寺本堂を仮校舎として開校。
- 明治 15年(1882) 11月 寺町に新校舎が完成、須賀村立須賀小学校と改称。
- 大正 12年(1923) 9月 関東大震災で校舎倒壊、三嶋神社境内にて授業を再開。
- 大正 15年(1926) 9月 須賀 1388番地に移転し、新校舎が落成。
- 昭和 7年(1932) 4月 市制施行により平塚市平塚第二尋常小学校と改称。
- 昭和 20年(1945) 7月 戦災により全校舎焼失、青空教室実施。
- 昭和 22年(1947) 10月 平塚市立港小学校と改称。
- 昭和 25年(1950) 10月 現在地(夕陽ヶ丘 22番1号)に新校舎落成、現在にいたる。

⑤ みなと児童館跡地 MAP H-8

平塚市立みなと児童館は、昭和42年6月、青少年や青少年育成者の交流の場や活動拠点として開館しました。建物は木造モルタル平屋建てで、面積は205㎡余りでした。

みなと児童館は、港地区郷土いろはカルタにも「郷土愛 はぐくみましよう 児童館」と歌われ、市内唯一の児童館として27年間、親しまれてきましたが、平成6年6月、高浜台に「みなと子どもの家(かもめハウス)」が開館するのに伴い、閉館しました。

⑥ 港小学校内の文化財 MAP H-8

須賀村と新宿との郷境杭

江戸時代には、幕府領、藩領、旗本領などが入り組んでいて、各村の境がはっきりしていませんでした。そこで、明治政府は土地に税をかける基礎資料として全国の土地の面積の調査を行いました。この杭はこのときの調査に基づいて設置されたものと思われまます。

奉安庫の門柱

平成16年(2004)1月、現在の幸町9番1号の土地から須賀尋常高等小学校時代の正門左側にあった「奉安庫」の門柱一対が掘り出されました。平成16年は港小学校が海宝寺に誕生した明治7年(1874)から数えて130年目に当たります。この節目の年に古い歴史をもつ港小学校の一部が発掘されたことに縁を感じます。



須賀の釣り船

この船は、港小学校に贈られたもので、これまでは相模湾で釣り人を乗せて魚釣りに大活躍した船です。これからは港小学校のシンボルとして、また学習の資料として役に立ってくれることになりました。

名称 八星丸
長さ 8m
幅 1.9m
重さ 約1t
定員 5名

力石

この2つの石は、以前は須賀仲町の正一位稻荷神社にありました。2つの石には廿四(24貫 約90kg) 廿七(27貫 約101kg)とそれぞれの重さが刻まれています。昔、町内の人達がこの石を持ち上げて力比べをして遊んだことから「力石」と呼ばれたようです。

平塚灯台(須賀の灯台)

昭和8年(1933)、東京と大阪間を飛ぶ飛行機の安全を確保する航空灯台として造られました。昭和43年(1968)に廃止が決まりましたが、市民の要望で海上灯台として動き続けました。その後、科学技術の進歩によりその役割を終え、平成12年(2000)の秋にとりこわれました。

⑦ 平塚灯台(須賀の灯台)跡地 MAP I-9

平塚灯台(須賀の灯台)は昭和8年11月、東京・大阪間に開設された航空路の安全航行を目的に、この地に設置されました。高さは16.96m(頂部まで)で、50km先からも光が見えたといわれます。

その後、航空機の発達に伴って、昭和43年には廃止が決まりましたが、船舶の航路標識として、また地域のシンボルとして残してほしいという要望により、44年12月に再スタートします。58年には鉄骨部分が建て替えられ、高さが約10m伸びて、26.86mとなりました。

しかし、老朽化が進み、船舶も人工衛星を使ったシステムなどを利用するようになったため、平成12年11月6日に消灯、67年の歴史に幕を下ろし、灯台は撤去されました。灯ろう部などは現在、港小学校に展示されています。

松原・八幡地区

① 馬入の大銀杏と神明さん MAP I-7

馬入村の鎮守であった神明社は、以前この地にありました。境内には大銀杏があり、沖から須賀の浜に帰る船の目印ともなっていました。昭和20年7月16日の平塚空襲で、黒焦げになりながらも生き残っていましたが、戦災復興に伴う国道一号線の拡幅工事のために、切り倒されてしまいました。

狛犬と御影石の鳥居は現在は中堂に移され、神明神社となっています。大樹の下には消防小屋があり、今その跡に消防団第五分団の庁舎が建っています。

② 東海道の往還と馬入松原 MAP H-7

明和元年(1764)に作成された「相州大住郡中原御林絵図」には、江戸幕府直轄林の名称と区域が示されており、「馬入村」の周辺には、「北中御林」・「阿孝御林」・「新宿御林」・「入会御林」が存在したことがわかります。なお、『新編相模國風土記稿』の馬入村の段には、「中原御林、十六所の内なり、新宿・入会・阿孝・北中等の字あり、(中略)此外村民持の林、一所あり」という記述を見ることができます。

③ 真福寺の絵画 MAP I-7

絹本着色 親鸞聖人像 (市)
絹本着色 聖徳太子像 (市)
絹本着色 浄土七高僧像 (市)
絹本着色 蓮如上人像 (市)

真福寺は、大永5年(1525)に諸国行脚の僧釈善秀が開いた浄土真宗の寺院です。同寺に伝来するこれらの画像は、その作風から室町時代後期の作と推定されます。

浄土真宗では、室町時代中期以降、本山の本願寺が浄土真宗の開祖である親鸞のほか、蓮如をはじめとする歴代門主などの尊像を下付する方式を確立しました。このため浄土真宗の地方寺院には下付された尊像が残されている例が多く、真福寺が所蔵する四幅もその例といえます。神奈川県内ではこの種の画像は数少なく、戦国期における真宗教団の実態を物語る資料的価値をも有しています。

④ 東海道 馬入の一里塚 MAP I-7

徳川幕府は東海道など五街道を整備し、江戸日本橋からの距離が分かるように一里塚を整備しました。一里塚は一里(約4km)ごとに造られた五間(約9m)四方の塚で、塚の上には主に櫻が植えられました。

馬入の一里塚は江戸日本橋から数えて15番目の一里塚で、東海道をはさんで南北に一つずつありました。文化3年(1806)に出版された「東海道分間延絵図」には、北側の一里塚の前に井戸が、馬入の渡しに向かう東側に川会所や川高札が描かれています。

⑤ 陸軍架橋記念碑 MAP I-7

大正12年(1923)9月1日、関東大震災により馬入橋が倒壊しました。地元の消防組・在郷軍人会・青年団の手で即日渡舟が運行されましたが、数日後の豪雨で流失してしまいました。

9月17日、陸軍第十五師団(豊橋)所属工兵大隊と第十六師団(京都)所属工兵大隊が急ぎ派遣され、架橋工事が開始されました。橋の馬入側を第十六師団、茅ヶ崎側を第十五師団が担当して、同年10月3日に完成させました。この記念碑は馬入側を担当した第十六大隊の業績を称えたものです。



⑥ 川会所跡 MAP I-7

川会所は、江戸時代に川越を取り締まった役所で川役所とも言いました。川所には川役人などが在勤し、川の深淺を計り、川留・川明を決めたり、渡船の管理や渡賃の徴収などを行っていました。元禄3年(1690)当時の旅人1人の渡賃は十文でした。



馬入の渡しには渡船が常備されていて、定掛かり村が須賀と柳島村、定助郷村が馬入村ほか4か村、加助郷村が田端村ほか十か村で、それぞれの村が渡しの業務の負担をしていました。

⑦ 東海道 馬入の渡し MAP I-7

江戸時代、幕府は大きな河川に橋をかけることを禁止しました。そのため、相模川(馬入川)や多摩川(六郷川)は「渡し船」、酒匂川は「徒歩渡し」などで渡っていました。



相模川には六十以上の渡し場があり、大動脈の東海道は「馬入の渡し」と呼ばれ、幕府が管理し、周辺村々の負担によって成り立っていました。当初、船は須賀村だけで用意していたようですが、元禄5年(1692年)に對岸の柳島村が加わりました。また、「川会所」の運営や船頭の確保は、馬入村など5か村が務めました。「川会所」や「川高札」は馬入村にありました。

渡し船には「小舟」と「馬船」があり、このほかに、將軍や大名用の「御召船」などが用意されていました。また、將軍の上洛など特別の場合には、幕府は「船橋」を架けさせました。

⑧ 彦右衛門新田 MAP J-7

この地はかつて相模川対岸「須賀村」の飛地で「彦右衛門新田」と呼ばれ、江戸時代前期に新たに開発された畑地でした。彦右衛門新田は、この地を開発した清田彦右衛門の名からとったものです。

彦右衛門新田の記録は、寛文5年(1665)の「相州大住郡須賀村御縄打御水帳(検地帳)写」が残っており、代官坪井治右衛門の検地による広さは九町四反八畝二〇歩(94000㎡)で、市内でも最も開発面積の大きい新田でした。

⑨ 長善寺の絵画 MAP H-6

絹本着色 観心十界曼荼羅図 (市)

観心十界曼荼羅図は、仏教で説く十界を上下六段に分けて描いたもので、画面の中央、人間界の中心に「心」の字を描き、そこから他の九界に転生する人々の姿を描いています。



制作は室町時代中期に遡るもので、粗い絹地に朱色を際立たせた墨色主体の彩色を施しています。人物の表現は御伽草子絵巻にみられるような愛らしい庶民の描写に通じるものがあり、当時の庶民生活の一端をうかがい知るものとしても注目されます。

紙本着色 如意輪観音像 (市)

六臂の如意輪観音を描いたものです。下辺の蓮華の花の上には白衣を着て合掌する女を、血の池には救いを求める女達を、更にその下には鬼卒二名と龍を描いています。その図様から、血の池地獄とその救済者としての如意輪観音を表したものと推察されます。観音像は古格を保つ一方、地獄には、素朴な庶民信仰を物語る図様を見ることができます。

本図は、如意輪観音信仰の広がりや庶民化を物語る作例であるとともに、その画風や様式から室町時代末期に遡る可能性を持つ貴重な作品であるといえます。